

県立図書館だより

令和2年2月

青森県立図書館報 第36号

デジタルアーカイブから



48 (行致店商標名) SNOW VIEW GAPPO PARK AOMORI 景雪園公浦合森青

『青森合浦公園雪景』（名畑商店）

(https://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/digital/cont/t0669_175.html)

青森市合浦公園にてスキーに興ずる人々。日本におけるスキーの発祥は一般的に1911(明治44)年オーストリア人レルヒが新潟県で行ったスキー講習とされるが、青森県ではそれをさかのぼること7年前の1904(明治37)年に野辺地町の野村治三郎がノルウェーからスキーを取り寄せて滑っている。

目 次

デジタルアーカイブから	1
企画展「作家×スポーツ展」	2
こんなレファレンスがありました	3～12
こどものひろば	13
ご存じですか？この人・この資料	14
ようこそ文学館へ！	15
カウンターからひとこと	16

作家×スポーツ展

青森県近代文学館では、2020年2月22日（土）から5月17日（日）まで、企画展示室において「作家×スポーツ展」を開催します。



1964年、オリンピックが東京で開催されました。このオリンピックは、アジアで初めて開催されたオリンピックであり、スポーツ界のみならず、作家たちにも強いインパクトを与えました。

本展では、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに先駆け、青森県近代文学館が所蔵する「作家とスポーツにまつわる資料」を展示します。そして、スポーツに熱中した作家たちのエピソードや、青森ゆかりの作家たちがスポーツをどのように観て、描いたのかについてご紹介します。

第1部では、溝口春翠、夏目漱石、太宰治らがどのように運動会を描いたか、「運動会」の変遷をパネルでご覧ください。

第2部では、プレイヤーとして、観戦者として、スポーツに熱中した青森ゆかりの作家たちのエピソードを紹介します。（正岡子規、増田手古奈、佐藤紅緑、サトウハチロー、宮川翠雨、三浦哲郎、寺山修司、石坂洋次郎、川上健一）

第3部では、青森ゆかりの作家たちのスポーツ作品、伝記、エッセイが掲載された著書や関連資料等をスポーツごとに紹介します。

1964年の東京オリンピックは「筆のオリンピック」と言われるほど、多くの作家たちが、新聞・雑誌に寄稿しました。第4部では、作家たちの観戦記をパネルで紹介しながら、東京オリンピック開催時の資料・記事を展示します。

○日曜講座「作家×オリンピック」 ※参加無料・事前申込不要

日時：2020年5月10日（日）14:00～15:00

場所：青森県立図書館集会室

～ こんなレファレンスがありました ～

【第33回】

故郷(ふるさと)の話題読み語り

「『青森NOW 創刊号』はEntertainmentである！」

近年立て続けに起こった、郷土雑誌の「終刊」。

県民の皆さんの惜しむ声の大きさに匹敵する、いえ、それ以上に大きな衝撃を受けたのは、長年、レファレンスを担当している私たちでした。



「地域情報誌」「タウン誌」「ネットワーク情報誌」・・・、呼び方は色々ありますが、掲載されている情報量と幅広さ、^{そうそう}錚々たる執筆陣、そこに遺されている多くの記述は、県内外からの問い合わせへの回答・典拠資料として、幾度となく私たちを助けてくれました。

今、改めて感謝の気持ちを「ありがとう」という言葉で伝えたい・・・。

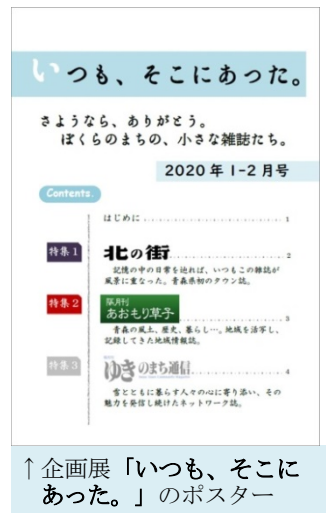
そんな思いを込めて、令和2年1月24日から2月26日の一カ月間、当館一階、企画展示コーナーで、「いつも、そこにあった。」と題し、青森の皆さんの生活の中にとけ込み、特に馴染み深かった『北の街』『隔月刊(創刊時は季刊) あおもり草子』『ゆきのまち通信』の三誌を中心に、終刊した郷土雑誌を紹介しています。是非、ご覧ください。



さて、展示に向けて改めて「郷土雑誌」を見てみると、この10年ほどの間に調査

・回答したレファレンス、「故郷(ふるさと)ミニ展示」などで紹介した事柄・人物・本、出来事など、多くのことが思いだされ、1冊の雑誌を読むのにも大変な時間が掛かってしまう始末。

今回は、そんな「郷土雑誌」の中から『青森NOW 創刊号』を取り上げ、「こんなレファレンス、展示、出来事etcもありました。」と、誌面を繰っていきたいと思います。



『青森NOW 創刊号』(昭和46年7月発行)は、**佐藤米次郎**さんの『青森ねぶたまつり由来』(版画：青森豆本として出版されています。)を表紙にはじまります。米次郎さんはまた、「現代青森「佞武多」考」(39ページから)と題して、佞武多の起源、「ねぶた」と「ねぶた」の違いについて、文章も寄せています。そのなかでも「(ねぶたの)掛け声」については、ご自身が東奥日報社に勤めていらしたとき、「ラッセ、ラッセ」という戦前までの掛け声に戻そうと、日本舞踊の先生に踊りの振り付けまでしてもらいながら、次年度以降の東奥日報社のねぶた運行休止によって果たせなかった思いも語っています。

米次郎さんには、米太郎さんという三歳年上のお兄さんがいて、同じく版画家として作品を残していますが、昭和33（1958）年、46歳の若さで急逝しています。

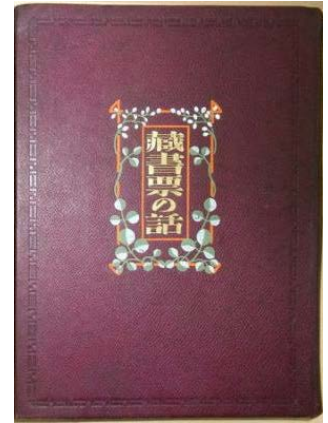
米太郎さんの生没年を知りたいというレファレンスがあり、『近現代の美術家』（青森県県史編さんグループ/編 青森県 2012）、『青森県近代版画のあゆみ展』（青森県立郷土館 1995）でお答えした記録が残っています。

お二人が版画をはじめた切掛けは、2018年の企画展示「生涯の書(とも)へ刻む標(しるし) 蔵書票 EX-LIBRIS」で紹介しましたが、70年ほど前に当館で所蔵していた1冊の本、『蔵書票の話』（斎藤昌三/著 文芸市場社 1929）です。

『蔵書票の話』に魅せられた佐藤米太郎・米次郎は、当館の特別貸出を利用して、四日で全て書き写し、座右の書としたそうです。

後に米次郎は、この本の編・著者 斎藤昌三の協力のもと、当時住んでいた仁川で、蔵書票展覧会を開催することになります。

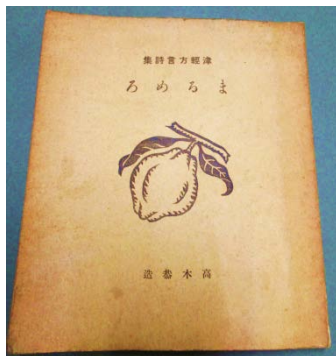
私たちがこの本の存在を知ったのは、今から10年以上前のこと、日本蔵書票協会会員、現在、日本豆本協会会長である「田中栞」氏からの、同書の資料状態、限定番号などの問い合わせからです。



この本は誤植本として知られる一方、誤植を修正する革片が貼られたもの、未修正のもの、修正された跡がないのに文字に間違いがないもの、全く異なる色の革（白）で装丁されたものなど、複数存在していることで、「謎の本」とされています。

調査はこの「謎」、異装本と出版冊数に関するもので、「本の謎解き帖(その八)『蔵書票の話』の謎～誤植のある装丁」（田中栞/著）と題し、『あうる NPO 図書館の学校機関誌 83号』（NPO 図書館の学校 2008）に記事が掲載されています。

『青森 NOW』3ページには、高木恭造先生の津軽方言詩「陽^シコあだネ村」が掲載されています。この作品は、詩集『まるめろ』に所収されている代表作の一つですが、ここでも幾つかの出来事が思い出されます。



或る日のこと、数冊の本を手にしていて職員横を、通り過ぎようとしたとき、1冊の本に目が留まりました。私は、何かが気になり、その本を横からグイッとつかみ取り、装丁、表紙を見て「ハッ！」としました。奥付を確認し、「この本は？」と、職員に尋ねると、「要らなかったら処分して良いからね。」そんな軽い調子で置いて行かれたものだとのこと……。

私は、「これは預かる。」と言い残し、二階の文学館へ……。

初版本の『津軽方言詩集 まるめろ』（高木恭造/著 『北』編集所 昭和6年10月5日）は、僅か100冊だけの出版で、「幻の本」とも云われています。一般的な寄贈本と同じ運命を辿りはじめたこの1冊が、「初版本」だったのです。現在この本は、一般の書籍の様にラベルを貼られることもなく、文学館で、大切に保管されています。

図書館司書は、「出版の歴史」、「書誌」などの知識も必要です。特に、青森での出版、郷土作家の作品などについては、大切なことです。

寄贈したいという方から、リストや本の画像を送ってもらっても、郷土作家の未所蔵本や出版の経緯・内容が重要な資料が含まれていることを判断できる知識が無ければ、「必要な本はありませんでした。」と、なってしまいます。或いは、郷土作家の作品が掲載されている雑誌を、一般の雑誌として処理してしまうといったことも起きかねません。

また、郷土関係の書籍でなくても、先ほどの「誤植・出版の謎」を秘めた『蔵書票の話』など、日本の出版史のなかで重要な書籍だと理解して、大切に保管・管理しなければならない本もあります。常に勉強が必要です。

さて『まるめろ』は、ソノシート付など、色々な形態・装幀で出版されていますが、外箱に活版印刷で使った紙型を利用したものがあるのを御存じでしょうか？



『定本 まるめろ』（青柳書店 1962；写真左）がそれです。

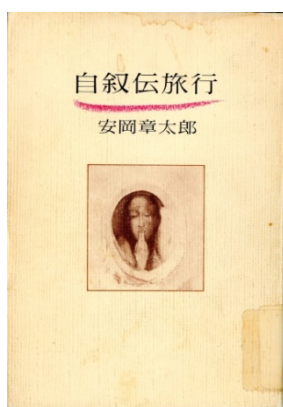
この活版印刷の型紙は、新聞社の出版などでは良く用いられています。

先ほどの『蔵書票の話』の斎藤昌三先生も、『新富町多典里』（芋小屋山房 1950；写真右）では、表紙に活版印刷の紙型を利用しています。

この『まるめろ』の活版印刷の型紙が、何時(いつ)の新聞のものか(勿論これらは、本物です。)、その書かれている内容から探り当てた職員がいました。是非、皆さんも挑戦してください。

「陽^シコあだネ村」の舞台である「**爰月**」は、青森市出身のイラストレーター、漫画家、絵本作家でもある「沢田としき」さんによって、『ほろづき 月になった大きいおばあちゃん』（岩崎書店 2001）という作品の舞台にもなっています。

沢田としきさんは2010年4月27日、白血病のため、東京都内の病院で、51歳の若さで亡くなられ、この4月で、没後10年となります。



『青森 NOW』 6～7ページは、石坂洋次郎が「岩木山と津軽」、8～10ページでは、安岡章太郎が「**弘前 暗さの中の明るさ**」と題して文章を寄せています。

安岡氏は、その中でも書いていますが、小学校3、4年のふた冬を弘前で過ごし、「第二大成小学校」に通っていました。

「暗さの中の明るさ」という、相反する感情の同居はどこから来て、文頭の「弘前は意外に書きにくい町だ」と言わせているものは何か、

その真相に迫るのではないかという体験が綴られていた本『自叙伝旅行』（安岡章太郎／著 文藝春秋 1973）は、津軽で行われていた「ジャンケン」に関するレファレンスで遭遇したものでした。

『自叙伝旅行』所収の「やり・へら・にっこ」では、「エンツコとゼッペキ頭」にはじまり、高木恭造の詩「風^{カジェ}に逆^{サガ}らる旗^{ハダ}」、鳥の鳴き声までがド、レ、ミと西洋風の音階を踏んで歌っているようだ、と津軽弁を論じていきます。

話は更に、「イタコ」「角は（宮川デパート）」、学生の町「弘前」のストイシズムなジャズ喫茶と、そこで交わされる津軽弁のジャズ論を紹介し、それがドイツ語的言葉だと太宰治の「ダス・ゲマイネ」を重ねて行きます。

その後に綴られているのが、当館では定期的に問い合わせのある定番中の定番、「十三の巨大都市伝説」「岩木山と安寿姫」、更には鷗外の著書『渋江抽斎』と、武勇伝で語り継がれる抽斎の末亡人「五百」、そして五百の祖先が安岡と同じ「土佐」であることに触れ、慣れない弘前の暮らしが、さぞ難渋したことだろうと、逆「ジャンケン」である「やり・へら・にっこ」に戸惑った体験に、愈々今度は、自分を重ねる独白となっていきます。

最後には、末裔と云う多くの方々から史料を求められる「義経伝説」、末裔と名乗ってくださる方はいませんが、安岡氏は何故か「津軽人」の自己充足と包容力が作り出した伝説として「キリスト伝説」まで出てきますから、とても楽しく読むことができます。

「キリスト伝説」については、「ナニヤドラヤ」はヘブライ語であるという説や、竹内巨磨が公開した「竹内文書」の「イスキリス・クリスマス（イエス・キリストとされる）の遺言」も加わって、長年にわたり、多くのご質問をいただいています。

今回、終刊した「郷土雑誌」からはじめた話ですが、郷土雑誌の終刊は、地方の小さな出版社の終わりをも、告げる場合があります。

ここで、皆さんに知っていただきたい出版社があります。

それは、「無明舎出版」さんです。

秋田の出版社ですが、先ほどの「義経伝説」では、『んだんだブックス 義経 北行伝説の旅』（伊藤孝博／著 2005）があり、宮城・山形から北海道までの「北行伝説」を紹介するなど、常に東北を意識した編集・出版をしている会社です。特にこの「んだんだブックス」シリーズは、東北エリアを捉えた内容で、タイトルに「とうほく」「東北」と付くものが殆どです。



ほかにも、『東北の街道 道の文化史いまむかし』（渡辺信夫／監修 東北建設協会 1998）『北前船 寄港地と交易の物語』（加藤貞仁／文 2002）など、青森県にも関係する内容で、多くの写真を用いた、とても分かりやすい本を世に送り出しています。

無明舎さんは、東北人として、何時までも元気に頑張っていて欲しいと思う出版社ですが、全国には、地域の歴史や魅力を伝える、是非見て欲しいと勧めたくなる本を発行する、小さな出版社さんが、まだまだ

沢山あります。『一度は読んでほしい 小さな出版社のおもしろい本 2019』（三栄書房 2018）で、地方出版社の凄さと魅力を感じてください。

『青森 NOW』8～10 ページの、安岡章太郎「弘前 暗さの中の明るさ」に戻しましょう。

岩木山の美しさに触れながらも、太宰の『津軽』の中で書かれている葛西善蔵の教え、岩木山が素晴らしく見えるのは、周囲に高い山がないからだという一節を紹介しています。「あれ、『津軽』のどこに書かれていたかな？」の私の呟きに、付箋を貼った本を素早く持ってきたのは、レファレンスのスタッフでした。（因みに、新潮文庫『津軽』102刷改版2004；写真右では、24 ページにその一節はあります。）



太宰の『津軽』が出ましたので、触れずに通り過ぎることができない、これもまた、青森県立図書館ならではの定番の質問と回答を紹介しましょう。

「太宰の『津軽』の冒頭、津軽の雪として「こな雪」「つぶ雪」「わた雪」「みず雪」「かた雪」「ざらめ雪」「こおり雪」と、7種類の雪が（東奥年鑑より）として書かれています、何年版の「東奥年鑑」の、どこのページに書かれているのですか？

昭和4年に創刊され、現在も発行が続く『東奥年鑑』は、太平洋戦争時に休刊を挟みますが、青森県の幅広い情報・記録を残す、大変重要な資料です。今回、展示で紹介している雑誌同様、多くの問い合わせにお応えするための調査資料、典拠資料として活用されています。

さて『東奥年鑑』に雪の分類が初めて登場したのは、創刊十周年の「昭和13年版」（昭和13年7月15日発行）です。「積雪の分類及びその名称を政府では十三年三月一日から統一使用させた」として、「気象」部門中に「雪の種別決定」の見出しで50～51ページに掛けて書かれています。

ところが、ここで書かれているのは太宰の『津軽』の記述とは異なり、6種類で、「乾雪」「濡雪」「締雪」「濡締雪」「粗目雪」「凍雪」となっています。

『津軽』の記述と同じものは、創刊十三年の「昭和16年版」（昭和16年7月25日発行）で、「雪の種類 積雪ノ種類ノ名称」の見出しで54ページに書かれています。



此处では、特に政府が決めたなどの記述はなく、「こなゆき」「つぶゆき」「わたゆき」「みづゆき」「かたゆき」「ざらめゆき」「こほりゆき」と『津軽』と同じ7種類紹介されています。

なお、その後に、「降雪ノ種類ノ名称」として、「こなゆき つぶゆき わたゆき みづゆき」と、4種類が列記されていました。

『津軽』は、昭和19年、太宰36歳の作品です。戦時下、紙の生産・供給、生産体制が十分に確保できなくなり、新聞統制も始まった後のこと、『東奥年鑑』も、この昭和19年から終戦後の昭和23年まで発行を休止していました。

『青森 NOW』11 ページには、「春から初夏へ」と題して、当時の竹内俊吉県知事の俳句10句が載っています。

「志功描く群青の鯉夏めくや」

文人政治家と云われる竹内知事は、多くの文化人との交流は元より、自身も絵を描き、短歌・俳句を詠むなど、青森県の文化活動・運動のけん引役でもありました。

※ 前述の「現代青森「俊武多」考」の前のページには、志功さんのねぶた絵が掲載されています。

「^{おぼろ}夜^よをかえり子よりも^{かな}孫愛し」と家族愛を感じさせる句もあります。

『隔月刊 あおもり草子』通巻 230 号（企画集団ぷりずむ 2015）「特集 あおもり電波伝説「人物編」① ふるさと党 文人政治家 竹内俊吉」を読むと、その魅力に引き込まれていきます。

2010 年秋 当館併設の「青森県近代文学館」では、「竹内俊吉 生誕 110 年展」を開催しましたが、太宰治展を上回るような人気だったと記憶しています。



「竹内俊吉 生誕 110 年展」



『竹内俊吉集成』



「竹内文庫：写真右手奥の窓際まで」

故竹内俊吉元知事の魅力を語り尽くすことはできませんが、その足跡は『竹内俊吉集成』（青森放送 1988）で辿ることはできます。この本は二分冊となっていて、「竹内俊吉の世界」では、数多く残された、書、絵画、風刺漫画、文芸、放送原稿、新聞の執筆記事、あいさつ文、座談の記録などが収められており、その多才さに改めて驚かされます。

中でも、自身が「東京時代に輪をかけた忙しいものになった。」と云っている「知事時代」の随筆に惹かれてしまうのは、そこに知事としての姿・影が見えないからかもしれません。

小さな出来事にこだわって、そればかり考えこむ妙な性格を書いた「小さいこと」、飼い猫との出会いと別れを書いた「わが猫の記」、或いは、俊吉以外には見せないであろう太宰の姿を書いた「津軽べんの彼」など、還暦を過ぎた文人の、飾らない思い出話や、独り言を聞いているようで、俊吉ワールドにググッと引き込まれます。

青森県立図書館には、「竹内文庫」があります。

竹内俊吉元知事のご遺族から、長年にわたり寄贈いただいた図書で、文学・芸術分野を中心としたものです。竹内俊吉氏 生誕 120 年の今年、氏の「本の魔力」という随筆などで、本への思いをお読みいただくとともに、竹内文庫を是非、ご利用いただければと思います。

もう一つの分冊「竹内俊吉の時代」は、故竹内俊吉元知事の年譜となっています。

今年の夏は、東京を舞台とした二度目のオリンピックが開催されます。

前回の東京オリンピック開催は、1964 年。この年は、竹内俊吉県政 2 年目の年でした。

聖火ランナーが全国を駆け抜け、10 月 10 日の開会式、国立競技場の聖火台に点火されたのは、今から 56 年前のことです。

この時、青森県への聖火は、津軽海峡を渡る青函連絡船の船上で、北海道からリレーされました。今夏のオリンピック開催が決まり、前回開催に関するレファレンスが寄せられるようになりましたが、多くは、聖火に関するものです。

この洋上での引継ぎについては『青函連絡船 栄光の航跡』（北海道旅客鉄道 1988）pp. 348～「第8章 オリンピック聖火海峡を渡る」に、「洋上引継式」の写真とともに、準備の段階、新造船を用いたこと、当日の様子など詳細に書かれています。

「竹内俊吉の時代」pp. 106-107 では、洋上で引き継がれた聖火が県庁前で知事に手渡されたときの写真が掲載され、青森県の第一走者だった「小山内道広」さん（当時青森市立第一高等学校：現県立青森北高等学校 3年生）の思い出が書かれ、そこには、「気配りの人」とも云われた竹内知事ならではの、心温まる（当事者の小山内さんや周りの人にとっては驚きでもあった）エピソードも添えられています。

ここまで如何でしょう、僅か数ページを読んでいる間に思い起こす、あんな事、こんな本。

『東奥日報』昭和29年9月25日夕刊、「新涼雑筆」という囲み記事のシリーズで、「丸卓感覚」と題された回の一節に、「・・・図書館の司書は普通の人よりは倍位は余計に本を読む。・・・」と、ラジオ青森時代の竹内俊吉氏が書いています。

確かに、司書を1, 2年もやっていれば、本のことで少し話をしてくれないかと言われ、困る司書はいないでしょう。

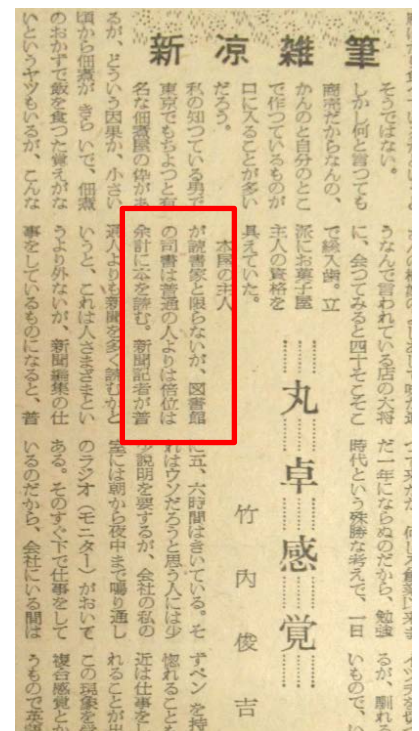
それだけ多くの本に触れ、読む仕事ということなのですが、皆さんが考えるような読書（小説を読むなど）とは、少し違うなど、感じていただけたでしょうか。更にです。

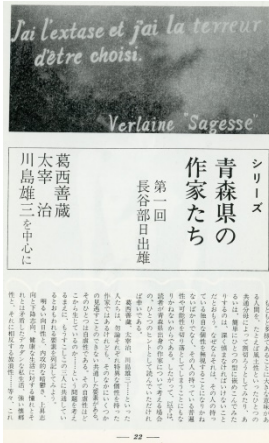
映画やアニメなどで、静かに本を読んでいるかのような姿が映像化され、図書館職員になりたいという本好き（読書好き）の若い人が多くいますが、実際には、重い本を運び、時にはその本が凶器のように足や頭に落下する、書庫から本を持ってくるために日に何度も階段を昇り降りする・・・という、どちらかと言えば、「体育会系」の仕事なのです。

また、利用者の方からのレファレンス（調べもののお手伝い）のため、館内で一見物静かに本を繰っているように見える司書も、頭の中は、求められている事を探す多くの可能性・調査方法を考えながら、時には10冊、20冊の図書を並行し、超高速で活字を追っています。

※ 『東奥日報』昭和29年9月25日夕刊、「新涼雑筆」という囲み記事「丸卓感覚」の画像は、古いので大変見辛くなっています。ご了承ください。

ここまでで、「図書館だより」としては異例のページ数になりました。





此処からは、できるだけ・・・短く紹介していきたいと思います。

『青森 NOW』22 ページから「シリーズ 青森県の作家たち 第一回 長谷部日出雄 葛西善蔵・太宰治・川島雄三を中心に」

「長谷部日出雄」は執筆者名で、「長部日出雄」氏の誤植と思われましたが、念のため専門家の方に「“長谷部日出雄”という、これを書くような（文学研究の）方、お聞きになったことありますか？（いらっしゃいませんよね…!）」と、根拠の無い変な確信をもってお聞きしたところ、「明らかな誤植でしょう。長部先生、怒っただろうね、きっと、もう二度と貴方のところのものは書かない…とか言って。」と、笑いながらお答えいただきました。

ここで司書の血が騒ぎだします。その後の『青森 NOW』に、果たして長部日出雄先生は、（怒らずに）執筆したでしょうか、と……。 （ご安心を、執筆しました!）

『青森 NOW』p. 27 には、当館ご近所にあった「Dタクシー」の広告が載っています。当時の車の写真も懐かしいのですが、会社代表者 I さんの「呟き」のような広告文が秀逸です。

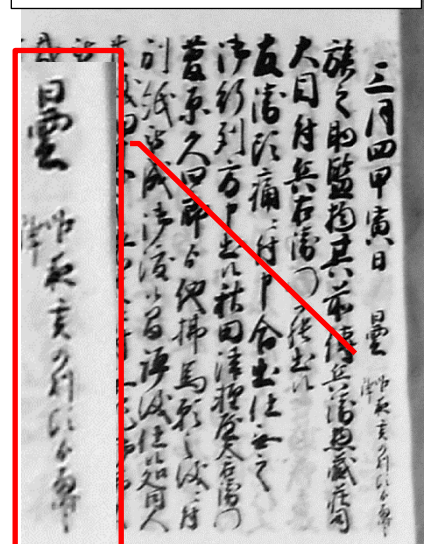
p. 46～「人の行かない…観光地 十三湖」では、民謡「十三の砂山」で知られ、景観の良さは、吉田松陰が「東北遊日記」に激賞を記した。と書かれています。

※「激賞」とは「非常にほめること。」（『広辞苑 第七版』新村出/編 岩波書店 2018）

土地の人たちが言う「松陰先生が全国を歩いて景色を賞めたのはここだけ。」は兎も角、松陰先生の「激賞」とは、如何ほどのものなのかと『来遊諸家紀行集 青森県叢書第三編』（翻刻資料）で見ました。

所収されている「東北遊日記」、嘉永五年三月四日（1852. 4. 22）に「真好風景也」とは書かれていますが、「激賞」？ 松陰先生が何か、特に景観を褒めることがなく、「やや！あの松陰先生が褒めたとは、これは激賞」とでも捉えたものか、或いは、余ほど天気^{どちら}が良く、遠方まで見渡すことができ、真に絶景だったのか、何方とも言えない書き方です。

『弘前藩庁日記』嘉永5年3月4日
弘前市立弘前図書館 所蔵
画像：当館所蔵マイクロフィルムから



そこで、お天気確認！弘前藩には、全国的にも珍しい江戸時代の二百年余りにわたる藩政を記録した日記が残されています。其処には、現代の日記同様、日付の下に天気^{どちら}が書かれています。

この記録を抽出、エクセルデータにし、CD-ROM 版で出版したのが『弘前藩庁日記ひろひよみ 気象・災害等の記述を中心に』（福眞吉美/編 北方新社）です。國元（弘前）の日記の1661～1740年までが vol. 1（2010）として、1741～1868年までが vol. 2（2014）として発行され、更に、Vol. 3（2018）では江戸の日記も加えたものが発行されています。

記録を見てみると、当日は「曇 昨夜亥の刻頃より雨時々降」、原本（画像ですが写真右上 赤枠内）も確認しましたが、間違いなく「曇り」しかも雨模様だったようです。

逆に考えれば、天気が悪くても「**真好風景也**」と、言わせたのですから、「絶景」「激賞」で良い気がします。

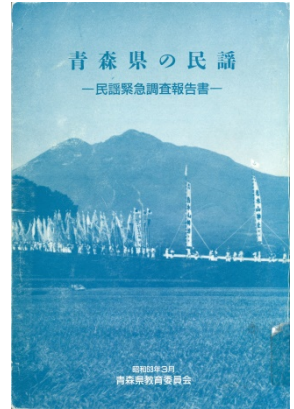
雪が融け、松陰が歩いた4月 ^{うづき} 卯月（旧暦の ^{やよい} 弥生・三月という言い方が良いでしょうか。）久しぶりに、十三湖にでも行ってみようかと・・・、出来れば曇りの雨模様の日に。

さて、“**民謡「十三の砂山」**で知られ”とも、書かれていますが、青森県の民謡についても、地域による歌詞の違いや、楽譜がないかなど、多くのご質問をいただきます。

幸いなことに、青森県教育委員会発行の『青森県の民謡』（1988）と、その全民謡ではありませんが、録音カセットがあるため、音源がないかという問い合わせなどの多くに対応できています。

この本は、サブタイトルの「民謡緊急調査報告書」と、当時の本間教育長の「序」でお分かりいただけますが、文化庁の補助を得て、昭和61・62年に県内の民謡を網羅的に調査し、1,600余の曲を録音したものを分類、記録したものです。因みに、「十三の砂山」は、柏村、鶴田町、市浦村（※ 調査当時の町村名）で調査されています。

録音カセットは現在、借りて行かれる方も殆どいらっしゃいませんが、音源は大切に保存しています。ご安心ください。



『青森 NOW』p.52「TOKO'S TALK」。今東光氏のTALKということで、洒落たタイトルですが、中身は“東光節”炸裂、自身のお名前、「今・^{こん}金」姓に纏わるご不満、怒りの体験、そして漢字文化への一石。そしてp.53は、「TOKO」に続いて「YOKO-ONO」オノ・ヨーコさんの作品と超豪華リレー。そう言えば、p.12は「ジョン・レノン(John Lennon)」の、p.21は、どう見ても「アンディ・ウォーホル (Andy Warhol)」の写真です。

この雑誌は1971年の出版ですから、皆さん現役バリバリ、^{さぞ} かし高額な掲載料であったのかな？と・・・。

『青森 NOW』p.56「青森と私」三浦哲郎の文で、八戸の詩人「村次郎」の四行詩を紹介しています。

村次郎は、実家・石田家旅館の再建のため、家業に専念していましたが、四行詩を創りため「余業詩集」と称していたと紹介しています。

2011年9月に、『村次郎 全詩集』（村次郎の会；写真右）が出版されていますが、その半年前3月11日の「東日本大震災」で、石田家旅館も大きな被害を受けました。

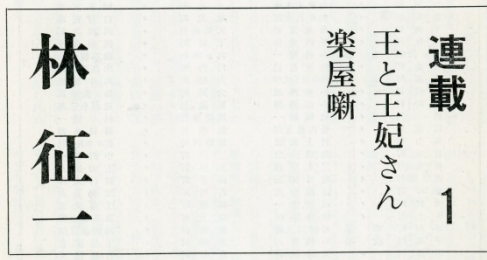
村次郎は1997年に亡くなっていますが、三浦や棟方志功らが訪れるなどした由緒ある建物が、津波で大きな被害を受け、取り壊されてしまったのは、残念です。



当時の様子（写真）は、「東日本大震災 八戸市の記録」の中で公開されています。

(https://www.city.hachinohe.aomori.jp/section/bousai/shinsai_dvd/photo-a/a03.html)

手元にある『村次郎 全詩集』を、久しぶりに開いてみようかと思っています。



『青森NOW』p. 60～ 「一人のストリッパーが死んでいった。」で、はじまる「王と王妃さん楽屋」は、ストリッパーさん、ストリップ劇場の内輪ばなしです。

だとすれば著者は、38歳で急逝するまでの僅か9年間でしたが、青森に移り住み、小説家、エッセイスト

として生きた「林 征二」さん（※「征一」は、またしても誤植！ということ）です。

林さんは、自らが生きた、日の当たらない場所を作品の舞台とした、『ヒモ』（大和書房 1971）『ちんぴら』（大和書房 1974）といった作品を残しました。

その経歴は特異の一言。詳しくは、青森県近代文学館「青森県ゆかりの作家」

(<https://www.plib.pref.aomori.lg.jp/viewer/info.html?id=176#7507-badc-924e-ce03-c6127de48edfcaff>)

「林 征二」氏のページか、『林征二の世界』（津軽書房 1980）を、ご覧ください。

どうしたものか、『林征二の世界』の編者は、先ほど名前の誤植に触れた「長部日出雄」。長部は、この本のあとがき「林征二と青森」で、

「かれが好んで作品の舞台に選んだ日の当たらぬ場所、見捨てられ、忘れられた場所は、（中略）いっそう日の当たらぬところへ押しこめられ、見捨てられ、忘れ去られていきそうなようすだ。」と、書いています。

近年、（「ちんぴら」の世界は知りませんが）ストリップの世界は、踊り子の ^{ひたむ}直向きな生き方、ミュージカルの様な筋立て、ダンスの素晴らしさなどに惹かれ、多くの女性ファンが劇場を訪れる、日の当たる、注目を浴びる場所と様変わりし、現在も全国にあります。

長くなりました、そろそろ、お終いにしましょう。版画から文学、そしてストリップまで、

『青森NOW 創刊号』は Entertainment でした！

最後に、『青森NOW』p. 106「発刊の辞」を。書いていらっしゃるのは、昨（令和元：2019）年6月、亡くなられた「**盛田稔**」先生です。私たち図書館司書だけではなく、郷土史・文化に触れる多くの人たちにとって、先生は、「レジェンド（legend）伝説的人」です。

2014年、当館開催の研修会で講師をされたとき、熱く語られるお姿を拝見し、何時までも「情熱」を持ち、打ち込むことの大切さを伝えられた気がします。

当館「参考郷土室」では、その時先生に書いて頂いた「看脚下」という書を飾っています。禅の教えで、“日常の一挙手一投足の大切さ”を説いたものです。

司書として、日々、一つ一つの経験を大切に、また研鑽を重ねていきたいと思っています。

● レファレンス申込み及び問い合わせ先 ●

青森県立図書館 参考・郷土室 電話 017-729-4311 FAX 017-762-1757

電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

こどものひろば



青森県の文化の向上発展に貢献した、個人又は団体に贈られる青森県文化賞。昨年 11 月に、令和元年度の受賞者が発表となり、3 名と 2 団体に知事から表彰状が贈られました。

※授賞式の様子 (<https://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/culture/bunkasho.html>)

今回の「こどものひろば」では、文芸（児童文学）の分野で受賞し、令和 2 年 4 月に創立 60 周年を迎える、**青森県児童文学研究会**をご紹介します。

青森県児童文学研究会（略称“児文研”）の発足は、昭和 35（1960）年。

当時、中学校の美術教師をしていた北彰介（本名山田昭一）さんが、機関誌『童話』（第 21 号から『ずぐり』と改題）を創刊したのが、はじまりでした。

実は、発足当時の会員は、北さん 1 人だけ。

しかし、創刊号の「児童文学研究会と言うものの、現在僕が一人である。これから、たくさんの僕と志を同じくするものが出て来てくれるだろう。そんな方はご連絡ねがいたい。」という北さんの呼びかけに、5 人、7 人と会員を増やしてゆくのですね。

たった 1 人でスタートした児文研は、「子どもに美しい夢を」をスローガンの下、多くの仲間とともに、子ども向けの文化・文芸活動を続けます。昭和 57（1982）年には、児童文化の芥川賞ともいわれている久留島武彦文化賞、特別賞を受賞しています。

創立当初の北さんの思いが、次のように記されています。

「子供らに夢をあたえたい。しらないうちに心が、魂が美しくなってゆくような、そんな物語を、詩を。」

『童話』創刊号（昭和 35 年 4 月 20 日発行）北彰介編 児童文学研究会 「あとがき」より

平成 15（2003）年に急逝した北さんの後を継いで、現在会長を務めているのは、元小学校長の野澤秀昭さん。

令和元年 6 月 30 日に、青森県総合社会教育センターで開催された夏のキッズフェアでは、当館児童閲覧室のコーナーで、紙芝居の実演をしてくださいました。

野澤さんの「津軽の昔はじまるよ～！」という声に、たくさんの参加者が集まり、津軽弁の語りに引き込まれていました。



夏のキッズフェア 2019 で
紙芝居を実演する野澤秀昭さん

児童閲覧室では、今年 4 月 24 日から、「ぼくたち、わたしたちのふるさと青森県～青森県児童文学研究会創立 60 周年記念～」で、青森県の児童文学を中心とした本の展示をします。お楽しみに！



青森県初のオリンピック選手は誰かご存じですか？

1928(昭和 3)年、オランダのアムステルダムで開催された第 9 回オリンピック大会に出場した陸上選手・井沼清七いぬませいしちです。

1907(明治 40)年 7 月 27 日に北津軽郡中里村(現：中泊町)で生まれた井沼は、県立弘前中学校(現：県立弘前高等学校)で陸上を始め、早稲田大学第一早稲田高等学院に進学。早稲田大学競争部で 織田 幹雄おだ みきお

(1905-1998)や 南部 忠 平なんぶちゅうへい (1904-1997)といった後の日本陸上界を代表する選手達とともに練習を重ね、4×100mリレーの第一走者としてオリンピックに出場しました。

残念ながら結果は予選落ちでしたが、当時の様子を織田は次のように記しています。

「400mリレーは、井沼、南部、山口、大沢のオーダーであった。日本はいちばん内側のコースで、トップの井沼君がよく走り、外側のイタリア、チェコをつめて南部君にバトンを渡した。南部君もよく走り、ハンガリーをぐつつめて山口君にパス、このバトンパスがうまくゆき、山口君がコーナーを廻ってアンカーの大沢君にバトンを渡すときは日本がトップに立っていた。」(織田幹雄『21 世紀への遺言』ベースボール・マガジン社, 1975)



井沼はその後も陸上競技を続け、1931(昭和 6)年に弘前市で開催された大会の 100 m競走では 10 秒 9 を記録。この記録は 1975(昭和 50)年に破られるまでの 44 年間、青森県公認記録として保持されました。

井沼は生前、青森県の陸上界に望むことを次のように語っています。

「青森県人に適する種目はなにか、ということを考えてみることに、長距離をやるならやるで、フィラードみたいに、もつと計画的に集中的にやることだ。」(「この人に聞く スポーツに生きて 井沼清七」『教育広報』1961 年 第 11 巻第 2 号)

現役引退後は後進の指導にあたり、日本陸上競技連盟の要職につくなどした井沼ですが、1973(昭和 48)年 10 月 1 日に 66 歳で他界しました。

参考資料：秋元良一「活彩人物伝 青森県が生んだスプリンター 井沼清七」『マイあおもり』(1996 年 第 45 巻第 8 号)

今回取り上げた資料のうち、『教育広報』は館内閲覧、その他の資料は館外貸出ができます。ぜひご利用ください。

ようこそ文学館へ！

近代文学館資料の紹介(第35回)

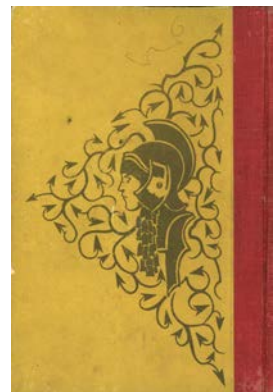
「作家×スポーツ展」展示資料から

青森県近代文学館では令和2年2月22日(土)から5月17日(日)まで「作家×スポーツ展」を開催しています。今回は展示資料の中から、野球に熱中した佐藤紅緑・サトウハチロー親子の資料をご紹介します。

①『あゝ玉杯に花うけて』

佐藤紅緑(さとう・こうろく)は、昭和2年「少年倶楽部」の編集長・加藤謙一(かとう・けんいち)の懇願によって、同年5月から翌年4月まで「あゝ玉杯に花うけて」を連載します。この小説は当時の子どもたちが描く＜大好きな野球で、エリート中学生たちを打ち負かすことができたらどんなに愉快だろう＞という夢を実現してみせました。「あゝ玉杯に花うけて」は熱狂的に少年たちに迎えられ、「少年倶楽部」は30万部から45万部に発行部数を伸ばしました。

当館には昭和3年発行の初版本もありますが、展示室には、昭和10年発行の第140版本を展示しています。当時の人気ぶりがうかがえます。



『あゝ玉杯に花うけて』第140版
(昭和10年4月22日、講談社)

②「アサヒ・スポーツ」第17巻第11号＜新収蔵資料＞

佐藤紅緑の息子・サトウハチローは、野球をはじめ、ラグビー、陸上、水泳、バスケットボール等、さまざまなスポーツに熱中した作家です。「アサヒ・スポーツ」には、1936年1月から「スポーツ小説」欄が設けられ、ハチローのスポーツ小説は、最も多く掲載されました。

ハチローは中学時代から父・紅緑に反発し、家出を重ねましたが、ハチローがスポーツを好むようになった要因の一つには父とのエピソードがありました。



「アサヒ・スポーツ」第17巻第11号

(昭和14年5月15日)

本展では、ほかにもスポーツに熱中した作家のエピソードやスポーツ作品をご紹介します。また、作家たちがどのように運動会及び1964年の東京オリンピックを見たのかについてもパネルにてご紹介しています。

スポーツが好きな方にも、文学が好きな方にも、ぜひご覧いただきたいと思っています。入場は無料です。

カウンターからひとこと(第34回)



今回は、“**図書館ボランティア**”についてご紹介します。

県立図書館では、図書館ボランティアの方々にお手伝いいただいています。平成24年度から活動が始まり、活動8年目となった本年度は、22の方が図書館ボランティアとして参加しています。



黒いエプロンを着用している方が図書館ボランティアです。

どんな活動をしているの？

○資料配架

利用者から返却された本を書棚の正しい位置に戻したり、本を記号順に並べたりする活動です。



本を正しい位置に並べることで次に使う人が本を見つけやすくなります。

○利用案内

館内施設や書棚の場所、利用方法など、利用者からの簡単な問い合わせに対応する活動です。

〇〇コーナーはどこにありますか？



こちらです



図書館ボランティアに興味のある方へ

令和2年度の図書館ボランティアを募集しています。

募集期間：令和2年3月3日（火）まで

詳しくは「図書館ボランティア募集」のチラシをご覧ください。

※図書館カウンター、図書館ホームページ等に掲示・掲載しています。